をみた新産業都市の建設も、計画の段階で足踏みして、目ざましい進展は見られなかった。

所得倍増を目標とした高度成長政策は、佐藤内閣によって修正を余儀なくされている。急に伸びすぎたため、あちこちに無理ができた。いわゆるヒズミの是正で、国内景気の不況にからんで当面の課題となっている。社会開発まことに結構。人間尊重大いにやってもらいたい。福祉国家の建設は万人の願うところ。あれもやりたい。これもしたいと思うが、残念ながら裏付となる財源が苦しい。昭和二十五年国土総合開発法が制定された当時が想い出される。特定地域の指定に当って、われもわれも と名乗り出て、猛烈な陳情運動が行われた結果、十九にも及ぶ地域が選ばれた。いきおい総花式にならざるをえない。そのため計画を実行する際、裏付となる予算が伴わず、遂に龍頭蛇尾に終った苦い経験がある。今度の新産都市は十三に止まったが、それでも計画の実現には相当の困難が予想される。

新内閣は寛容と調和をその政治姿勢とする。新産都市計画を中央で調整することは当然であるが、地方にあっても客観状勢を正視して、よく可能性の限度を見きわめ、いやしくも計画倒れや、期待外れに終らぬよう十分に審議検討する必要がある。特に、不知火、有明、大牟田地区の場合は、二県に跨る広域経済圏確立のテストケースともなっているので各方面から注目されている。またこれからの開発を待つ地域であるので、既成工業地帯を参考として、理想的な進め方もできる。工場誘致を急ぐの余り、生活環境の整備や公害問題の解決などを怠ってはならない。川崎、四日市、尼ケ崎などの先例をよく研究して、真に住民の為になる計画を実現することである。

内外の情勢は大きく流動している。日本の産業構造や貿易内容も変らざるをえない。地方の産業立地条件も移行しつつある。中共の存在は、世界の情勢と日本の立場に大きな影響を与えずにおかない。東南アジアに対する経済外交は今後ますます重要となろう。日本の西南端に位置することが、却って貿易を振興し産業の発展と人口の増加を促すことになる。

新産都市の建設を契機として、大きな夢を実現したいものである。

（興国人絹八代支社長）

地蔵邂逅

宗　弘容

新しく地蔵さんを建てたいので……と言って、地蔵さまについていろいろ相談を受けることがある。交通禍のあった道ばたには、必ずと言ってよい程地蔵さまが建てられる。子供の水難や舟があると、すぐ又地蔵さんである。その地蔵さまが町の石工さんに刻まれて立派に出来上り、いよいよ開眼の日となると、警察署長さんが、村長さんが、小学校の校長さんかが施主になって、開眼供養が営なまれる。私の住む町の近くにも近年、四五体のそうした地蔵さまがお立ちになった。皆赤や白の涎掛けをかけ、いつも新らしい野の草花で飾られている。それは多分近所の人たちが人知れず差上げる供物にちがいなく、

つつましき草餅二つ野の仏

のように、きわめてひそかなつつましさである。

過去十年に近く、私はこの国土の北から南へと巡り歩いて、邂逅した地蔵さまの数は数千体に上っていようが、どの地蔵さまも例外なく、もとはと言えばこうした由縁で誕生されたものである。力の弱い者、悲しめる、不幸せな者の味方で、身は墨染めの法師の姿で、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）を経めぐる遊化諸地獄決定代苦の仏なのである。だから雨露を避ける堂宇も持たず、身に金色の光も帯びないうらびれの姿のままなのである。それでいて、地蔵さま程、おめでたい福種に満ちた仏も少ないとされている。地蔵十福と説かれているが、むつかしい話はおいて次の句など、全く衆生に生きる地蔵さまの面目を物語っているものである。

たよりなき道は地蔵も力にて

巡礼もはらみ地蔵をふし拝み

はらむ稲は子安の地蔵菩薩かな

お地蔵のお首にかける古書かな

腹帯を地蔵の御月番にしめ

延命は皆短命の子のお世話

四国札所八十八ケ所のお遍路にとって、何よりのよろこびは、そのむかし弘法大師の歩かれた道々を辿ることにある。尤も今は何もかもインスタントばやりということで、バスや自家用車で打ち巡る十余日のスピード遍路が多くなった。しかし何と言っても、真の楽しみは千里不遠のおもいをこめて、札所から札所へと歩いて順打ちする遍路に如くものはない。お大師さまが歩かれたという古い道をそうしたお遍路は鈴の音を鳴らしながら歩いいて行く。こんな道は、車にはねられて怪我をしたり、悪くすると命を落す心配もなく、心をゆるして四国の山や川岸を眺め、風の音空のたたずまいに、心を融かすよろこびに恵まれる。

道ばたや辻には一里塚みたいに必ず地蔵道標が石に刻まれて、この道々の風雪の古さを物語っている。二ケ月に近い日を重ねて、第八十八番の札所に結願を終えた時の私には、一つの固疾をいやし断煙という副産物が恵まれていたが、それは遍路の途次、身に粗食を甘んじ、心に悪念を払う四国路の風光に明け暮れた余沢であったのであろうか。

お互の国土の古い道も、だんだん私たちの生活から遠のいて行っている。立派すぎるようなアスファルト道路がつくられて行くが、こんな新しい道は、車を走らせる道であって、人が歩く道ではなさそうである。こんな道でいつもたくさんの人の命が消されている。こんな安心の出来ない道を、人はよい道と言ってほめたたえる。私はそんなよい道が、アメリカのように八十%とか九十%とかの高度の発達をした時の、日本の国土のわびしさをおもって淋しくなる。

ともあれ、私は余生の力のある限りを、地蔵さまとの邂逅にささげたいと思っている。地蔵さまは無抵抗の標本みたいな仏なので鼻が欠け、首が落ち、やがて亡んで行くだろう。ほろびしものはなつかしいにちがいないが、そうした亡びゆくものの姿のほんの一分でも、生きるしるしに描きとめておきたく願っている。

（人吉市・写真家）

海外旅行の断片

高橋重博

パリの自動車

パリで、車の前後に黒いゴムの制圧具をつけている自動車を多くみた。丁度三角港でみる様な小型汽船の船首や、胴に自動車の古タイヤを接岸などの場合の制圧具としてつけている様に、その小型タイヤに似た様なゴム具が車の前後についているのだ。理由をきいてみたら、自動車の接触事故が多く、特に婦人運転者にこの事故が多いので、男の運転者の車は、寧ろ防禦用にこれをつけているとのこと。婦人運転車が側に来て駐車姿勢でもとろうとすると附近の車はヒヤヒヤしているとの話だ。

更にどうして婦人車に多いのかときいてみると、婦人運転者は走り中は貴婦人らしく、然も美人らしくすましているが、イザ駐車という時のブレーキの踏み方もスマートに美人らしくやりたいのだろう、思いきって強く徹底的にブレーキを踏まないので、中途半端になって完全にストップせず、だ力で前の車にぶつかったり、反動で後の車に突き当つたりするとの事。

私にはどうもピンとこない理由であるが、この種の事故の加害者が婦人に多いということと、ファッションモードなどと何でもスマートさを第一義とするパリ婦人の事を考えてみると、右の理由は必ずしも当らざる理由ではないと思われる。都合では日本でもこんな前科があったり、又は事故を起しそうな不安な車には、この制圧具をつけることにしたらどんなものだろうか。

世界に雄飛している大和撫子

日本の娘さん達が世界各国に広く活躍しているのを見て大いに喜んだり、驚いたり、又少しばかりヒヤヒヤしたり。アメリカの